10

鄙のまれびと
hina no marebito

「世界最強クライマー」と呼ばれた男

登山家 山野井泰史（やまのいやすし）氏 (54)

なぜ人は山に登るのか？ ジョージ・ハーバート・リー・マロリーの「そこに山（エベレスト）があるから」という名言がある。2002年秋、ヒマラヤのギャチュン・カン（7985メートル）を目指し北壁登頂に酸素ボンベなしで成功、「世界最強のクライマー」と呼ばれた男がいる。奥多摩町在住の登山家、山野井泰史氏だ。朝日スポーツ賞や植村直己冒険賞を受賞。ノンフィクション作家の沢木耕太郎氏が何度も取材し、壮絶なクライミング（岩登り）を『凍』で描いた。

山野井氏は頂上に立った瞬間、吹雪なのに一瞬青空が見えたが、帰りが容易でないと感じた。現に下山で雪崩（なだれ）を何度も受け、凍傷で両手右足の指10本を失う代償を負う。さらに酸素や栄養不足で視神経をやられ、脱水症状に陥る。一緒に登った妙子夫人は高度順化がうまくいかず、頂上まで僅か200～300メートルの地点で断念している。

山野井氏が山に惹かれたのは小学生の時。フランスのシャモニーが舞台のテレビドラマ「モンブランへの挽歌」を観てからだ。以来24時間脳みその半分以上、山登りのことを考え、アルバイトで資金を貯め、叔父と丹沢の沢を歩き北岳にも登った。高校卒業後はアメリカのヨセミテでフリークライミングに没頭。ハーフドーム北西壁ワンデイクライムやエル・キャピタン・ラーキング・フィア単独第3登などの記録も残した。続いてヨーロッパアルプス、パタゴニア、ヒマラヤとフィールドを広げた。

氏は単独行にこだわる。あくまでも自分のペースで登り、他人の助けを必要としない。「インターネットに頼りすぎると動物としての能力がどんどん衰える。湿った風が吹いているからそろそろ雲が発生するとかは天気図を見てもわからない。雪崩も実際に雪を踏んだときの音と感触を自分で確かめることを優先する。ただ雪山は頻繁に登っていないと勘が鈍る」と話す。

危険な登山に両親は一度も反対しなかったという。滑落したとき父親から「気をつけろ」と言われ、母親も心配しながら「好きなことをやりなさい」と応援した。妙子夫人とのなれそめは、夏にブロードピーク（8047メートル）という山へ一緒に登り、秋に彼女がマカルー（8481メートル）という山で凍傷になって山野井氏が見舞い、今度は山野井氏が富士山の強力（ごうりき）の仕事中に落石で足を骨折し、先に退院した彼女が訪ねたこと。居を奥多摩にしたのは鳩ノ巣渓谷や氷川屏風岩の岩場があるから。間もなく30年になる。山野井氏は「死ぬのは普通の人と同じように怖いが、それよりも登りたい気持ちが勝っている」と言い、今年の秋もイタリアの岩場に再挑戦する。

文 山ノ堀正道　写真 岡村繁雄